

臨床研修を終えて

愛媛大学医学部附属病院臨床研修センター研修医

佐藤恵理子

今回、地域医療研修として2012年4月から2か月間久万高原町立病院にて研修させていただきました。春は街中に桜が咲き、夏は高地で涼しい四国カルスト、紅葉の美しい面河溪、ウィンタースポーツなど自然豊かな街であり、愛媛県出身の私にとって久万高原町は毎年観光に訪れる身近な土地である。地域医療研修先として数ある病院の中から、愛媛大学医学部地域医療学講座のサテライトセンターであり、学生への教育にも熱心なこの町立病院を研修先に選んだ。

1年目を全て大学病院で研修してきた私にとって、この町立病院での研修はとても新鮮であった。研修の内容としては、内科を中心に研修させていただいたが、病棟業務、超音波・内視鏡検査、診療所での診療、学校検診など多岐に渡っており、何か処置がある度に外科や整形外科の先生方に声を掛けていただいたおかげで、満遍なく充実した研修ができた。

この久万高原町立病院での研修を通して、地域医療に関して感じるものがいくつかあったので率直に述べさせていただく。

まずは、大学病院とは患者さんの年齢層がひと回り違うということを実感した。入院中の患者さんは寝たきり状態の方が多く、入院の契機となる疾患も誤嚥性肺炎などADLの低下によって引き起されるものが大半を占めていた。退院するにあたっては、家族、病院職員、介護施設職員などを含めたカンファレンスが行われる。カンファレンスでは現在の全身状態や介護度、今後必要になるサービスなどを含めて、さまざまな内容が話し合われる。大学病院での研修中はそのような機会に出会うことはほとんどなかったが、地域の病院では都会にいる子供の家には移らず、独居であっても住み慣れた地元に残ることを希望する方は多いため、「地域に帰る」にあたって個々人のニーズにあったサービスを提供することが必要である。「この方は久万の〇〇に住んでいて、この間は頸部骨折で入院していました。独居で、親戚は△△に住んでいて…」と患者さんの情報が次々と出てくるカンファレンスを聞いていて、地域で支えていくためには、さまざまな人が患者さんに関わり、みんなで支えていくという体制が大切であると実感した。

久万高原町立病院は地域の中核病院ではあるが、やはり施設で出来ることに限界があることも感じた。大学病院のように様々な検査、高度な治療ができるわけではない。限られたものの中で必要な検査・治療を行い、さらに高度なものが必要であると判断すれば、適切な病院へ紹介させていただく。これは日常茶飯事であり、その判断の見極めが重要であり、また、地域の病院を存続していく上では他院との連携も大切であることも痛感した。

地域の病院ではよくあることであるが、久万高原町立病院も紙カルテ運用はまだ残っ

ている。しかし、オーダーリングシステムなど電子化が徐々に進んでおり、電子カルテで育ってきた私たちのような臨床研修医にとっては大変ありがたく働きやすかった。当初は地方は保守的であるという印象が強かったが、地域の病院であっても、より良い診療ができる体制を整えようと努力することは、医療従事者の働きやすさを改善すると同時に、患者さんにとってもプラスになることではないだろうか。

2か月という大変短い期間ではあったが、地域医療の現状を知る上で充実した研修であった。この経験を今後の診療に活かしていきたいと思う。

最後になったが、山下統括院長をはじめ、久万高原町立病院の先生方、スタッフの方々、私を受け入れてくださった久万高原町の方々にこの場をお借りしてお礼を申し上げます。